

<研究ノート論文>

## 中国におけるいじめ傍観者の援助行動を促進する状況要因について

元 笑予

(東京学芸大学大学院)

On situational factors promoting bystanders' aid response to bullying in China

Xiaoyu YUAN

Tokyo Gakugei University

キーワード：いじめ，傍観者，援助行動，促進する状況要因

KEYWORDS: bullying, bystander, aid response, situational factors promoting

### 抄録

本研究では、中国におけるいじめの傍観者がいじめに対してとる多様な対応方略を探索的に明らかにすることを目的とした。また、いじめ場面の傍観者はどのような条件があれば、援助者になることができるのか、傍観者が援助者になることを促進する状況要因を明らかにすることを目的とした。中国の高校生及び大学生を対象とし、シナリオ法を用いた質問紙調査を行った。男女差を考慮して、男女別に、集団性（個人・集団）（被験者間要因）と被害者の特徴（よい・よくない）（被験者間要因）を独立変数、援助行動を従属変数（被験者要因3水準）としての2要因被験者間要因の分散分析を行った。その結果、「被害者の特徴」、「加害者の集団性」、「言語的いじめ」という3状況要因が示されることが明らかになった。考察では、この3要因について、傍観者が援助者になることに寄与する条件を検討した。

### 1. 問題

近年、中国において小・中学校のいじめが以前と比べて増加していることが報道されている。実際の研究を見ると、この問題の重要性がはっきりする。例えば、1999年、陳(2001)は天津市で7～18歳の小・中・高校生3,332名に調査を行った。その結果、よくいじめられると回答した小学生は20.3%、中学生は11.8%、高校生は4.0%、毎週少なくとも一回程度いじめられると回答した小学生は7.2%、中学生は2.7%、高校生は1.5%であったと報告している。現在、中国ではいじめ問題は学校教育現場で不可避な問題になっている。中国では、日本と異なり、いじめの要因や背景に関する研究は少なく、実態調査研究が主

である。また、中国と日本は社会形態が異なり、同じアジアでもそれぞれ独自の特徴を持っている。桑(1997)によれば、中国は、膨大な人口、また経済改革による発展の不均衡、近代化の遅れによる日常生活上の困難などの問題を抱えている。このような社会背景と中国独自の教育体制の中で、いじめ問題の特徴は明らかにされていないことが多い。そこで、本研究では、中国のいじめ問題の特徴を明らかにする。そして、中国の社会的・文化的背景と結びつけながら、中国におけるいじめ問題の解決の糸口を得る一つの契機とすることを目指す。

## 2. 先行研究

中国の研究では、「いじめ」はまだ十分理論的に概念化されておらず、辞書に「いじめ」という単語は掲載されていない。ただし、中国の一部の学者間では、いじめは「力の強い方(単数か複数)から力の弱い方に与える攻撃である」という Smith(1991)の定義が用いられている。特に、張(2006)の研究では、いじめは、いじめる側といじめられる側の間に存在し、力の不均衡という特徴を持つ特殊な攻撃行為であり、いじめる側は身体的・心理的、及び社会地位的に優位に立ち、いじめられる側は劣位に立つとされる。そのため、中国では、いじめは力の強い方が弱い方に行う攻撃行為を指していると考えられる。そこで、本研究では、いじめはいじめる側がいじめられる側に対して加える「攻撃行動」の一つとして捉えることにする。

「いじめ集団の四層構造理論」(森田・清水, 1994)によれば、いじめにかかわる人々は、直接いじめを行う「加害者」、加害者から直接いじめ行動の被害を受ける「被害者」、自分で直接手を下してはいないが、周りで面白がってはやしたてる「観衆」、見てみぬふりをする「傍観者」の4者に類別される。その中でも、傍観者(見てみぬふりをする)という児童・生徒が一番多く存在している。いじめの持続や拡大には、いじめる児童・生徒といじめられる児童・生徒以外の「観衆」や「傍観者」の立場にいる児童・生徒が大きく影響している。「観衆」はいじめを積極的に是認し、「傍観者」はいじめを暗黙的に支持しいじめを促進する役割を担っている。

大坪(1998)は、いじめ傍観者の援助抑制要因を検討している。いじめ場面の仮想物語と山崎(1996)が作成した援助抑制要因項目の一部を変えて、小中学生を対象に調査を実施し、「事態の肯定」、「被害者への帰属」、「いじめに対する恐怖」、「評価懸念」、「事態の悪化への懸念」、「事態解決の糸口のなさ」という6因子を抽出した。因子ごとに、①傍観者と加害者・被害者との友人関係、②加害者の人数、③男女差、この3条件によって援助抑制要因に違いが見られるかどうかを分析した。その結果、被害者と友人関係にあるか否かが、第三者の援助行動のあり様に大きな影響を与えることを示した。

久保田(2012)が「今後は男女のいじめの違いをジェンダーの視点から検討する研究が

求められよう」と述べているように、今後のいじめ研究を推進するにあたっては男女別によるいじめ内容の特徴を明らかにする必要がある。そこで、本研究では、男女差を考慮に入れて、「いじめをとめない理由」を明らかにする。しかし、久保田の研究ではいじめの種類（身体的いじめと言語的いじめ）による傍観者の援助行動の違いについて言及されていない。本研究では、性別といじめの種類（身体的いじめと言語的いじめ）について検討するが、要因が複雑になる可能性があることから、男女別に分析し、さらに、いじめの種類も別に分けて、分析する。傍観者が、いじめに対して行う多様な対応の仕方を探索的に明らかにすると共に、いじめ場面においてどのようにしたら傍観者が援助者に変われるのか、さらに援助者になることを促進する状況要因を明らかにする。

先行研究（元・坂西，2016）を基に、被害者の特徴が、第三者のいじめへの介入、援助・抑止行動にどのように影響するのかを吟味することにする。本研究では、被害者の特徴として次の3つを取り上げる。第一は、被害者の学業成績（成績がよいこと）であり、第二は性格や特徴（わがまま・粗暴など）であり、第三はコミュニケーション能力である。以下にこれらの3つの要因が、第三者の援助・抑制行動に影響すると考えられる根拠を述べる。

最初に、倫理的な面について触れる。被害者の個人要因、とりわけ「社会的望ましさ」の低い特徴や否定的属性を取り上げることには倫理的に慎重でなければならない。本研究では倫理的な問題には注意しながらも、教育現場で潜在的に重要な児童・生徒の消極的な、社会的望ましさの低い諸特徴が、いじめへの傍観者の介入、制止行動にどのような影響を及ぼすのかを検討することにする。取り上げる第一の要因は、児童・生徒の「成績」にかかわるものである。成績の「良し悪し」は児童・生徒が関心を持つ問題である以上に、教師・学校関係者が注目し重視する問題である。換言すれば、成績を一つの評価尺度にして、児童・生徒と学校の「社会的望ましさ」の序列を強く意識しているのである。中国では、成績が最も重視されている。成績が良くない児童・生徒はクラス中での地位が低くなる可能性がある。

第二は、児童・生徒の「性格」、言動の特徴である。いじめには、加害者の粗野な暴力的行動が伴う場合が多い。注意すべきは、加害者と被害者が、容易に入れ替わることが、現代のいじめの大きな特徴であることである（坂西，2011）。おとなしい子、積極的な子そして乱暴な子と、様々なタイプの子がいるが、これらの児童・生徒はある時は加害者に、またある時は被害者になる。児童・生徒のいろいろな特徴、独特の特徴を持つ子が、被害者になる可能性が大きい。児童・生徒がいじめ場面に遭遇した時、いじめに介入し、制止できるかどうかは、被害者の特徴に影響されると考えられる。本研究では、児童・生徒の属性が、傍観者のいじめ制止に及ぼす効果についても検討する。

第三は、児童・生徒のコミュニケーション能力である。人間関係（依存性）については、

人とコミュニケーションをうまくとるか否かで人間関係を捉えることが重要である。友達もなく集団から孤立している児童・生徒をいじめても、誰からも手助けされることはないだろうという周囲の児童・生徒の安心感から、そうした児童・生徒はいじめられやすくなる。特に、加害者が複数の時に標的となりやすくなる。本研究では、児童・生徒のコミュニケーション力も考慮に入れて、傍観者のいじめ制止に及ぼす効果を吟味する。

### 3. 仮説

本研究の仮説について述べる。被害者の成績については、中国では受験戦争における成績至上主義の影響で、成績のよい子に対する周囲の反応は一般的に肯定的になると予想される。成績のよい児童・生徒は、教師や周りの友達に疎んじられることは少なく、いじめられにくくなる可能性が高いと考えられる。また、彼らは自信があり、自尊心も高く、周囲の環境によって萎縮することが少ないと予想できる。そのため、周囲の子は、彼らはいじめられても、自分自身で解決する能力を持つと考える可能性が高いと考えられる。以上の理由から、傍観者は、いじめに介入し、制止する必要性を感じないと考えられる。他方、成績の低い子は、序列が強く意識される学校環境では、社会的地位が相対的に低くなり、いじめの対象になりやすい可能性がある。傍観者は、彼ら自身の社会的立場は弱いと認識し、いじめられた時に介入し、制止しないと事態は悪化する可能性があるかと推測するかもしれない。そのため、いじめに介入し、抑制する可能性が高いと考えられる。以上から、傍観者は、成績の高い子より低い子がいじめに遭っている時に、事態に介入し制止することが多くなると考えられる。

次に、性格については、おとなしく、反応が緩く、言語表現を得意としない子をいじめられやすい性格として焦点を当てた。おとなしい子、自己表現の苦手な子は、自分が不利な立場に置かれたとしても、自己主張することが十分できず、一方的に守勢に回らざるを得ないことが多いと予想できる。それに対して、行動的で積極的な子は、言葉で意思表示したり、行動を通じて自己表現したりすることが可能である。したがって、一方的に不利な立場に甘んじ続けることは少ないと思われる。後者に比べ前者の児童・生徒に対しては、傍観者は何らかの援助、支援ないしはいじめを制止する必要性をより強く感じると推測できる。このように、児童・生徒の特徴、性格・行動特性によってもまた、傍観者のいじめへの介入、制止行動は大きく影響されるであろう。この点の吟味が本研究の第二の目的である。王（2003）により、中国人は積極的な性格が育てられ、物事をプラス的に考える側面を備えるようになった。以上より、傍観者は積極的で特徴のよい子より、特徴のよくない子がいじめに遭っている事態で、傍観者は介入、制止する行動をとることが多くなると考えられる。

ところで、いじめは多くの場合、個人対個人の対一の関係で起こることは少ない。集

団内で、特定の個人に言語的、身体的攻撃が継続的に繰り返されることが多い。本研究では、集団的ないじめと個人的ないじめでは、傍観者の介入の容易さ、制止行動のとり方に違いが生じるのか否か、探索的に検討を試みる。なお、要因が多くなり結果の解釈が難しくなることを防ぐため、集団場面と個人場面を分離し、それぞれ独立に分析し検討することにする。本研究では、調査協力者に現在のいじめの実態と経験を直接問う方法は用いなかった。最大の理由は、児童・生徒に、いじめの実態・経験についてつぶさにかつ詳細に調査をすることは、精神的苦痛を強いる可能性が大きく、潜在的ないじめがある場合、事態を悪化させる危険があるためである。第二の理由は、教育現場においていじめ問題に対しては、厳しい対応が求められており、外部からの調査依頼が極めて困難な状況にあることがあげられる。

#### 4. 研究目的

以上より、本研究では、中国におけるいじめの傍観者がいじめに対してとる多様な対応方略を探索的に明らかにすることを目的とした。また、いじめ場面の傍観者はどのような条件があれば、援助者になることができるのか、傍観者が援助者になることを促進する状況要因を明らかにすることを目的とした。高校生と大学生を対象とし、回想法を用いて上記の仮説を検証する。回想では、中学1年生の時のことを思い出して質問紙に回答することを求めた。その理由は、高校生と大学生はいじめの当事者ではなく、客観的に冷静に回想し、回答することができると思ったからである。なお、中国の一般中学校、高等学校、大学の年齢区分は、日本と同じである。

#### 5. 方法

##### 調査時期

中国天津市における高校と大学の調査は2011年3月に実施した。

##### 調査対象

中国天津市にある重点高等学校の高校1年生220名（男子109名、女子110名、無回答1名、平均年齢16.1歳）及び天津市国立大学の大学3年生174名（男子104名、女子69名、無回答1名、平均年齢20.3歳）であった。中国の重点高等学校とは、国が重要で主要な公立学校として認定し、財政面、進学面等各方面で力を入れている学校である。

##### 調査の実施

調査は、大学と高校で授業の一部を使用して集団実施した。質問紙は授業後に直ちに回収された。調査開始前に無記名回答であること、中学校1年生の時を振り返りながら、答

えたくない質問には答えなくてよいこと、一つの質問には深く考えなくてよいことを伝えた。また、調査に先立って、一般的な傾向を明らかにするための調査であり、個人を取り上げた個別の分析は行わないことを説明した。その上で、可能な範囲で調査への協力をお願いした。特に、回答拒否はなかった。

### 質問紙の作成

本調査は、いじめの経験、いじめが起こる時の対処行動、男女差と児童・生徒の特徴（良・不良）による身体的いじめ・言語的いじめに対する意識などにかかわる項目を作成し、質問紙にまとめた。いじめ事態の設定は、事例としていじめのストーリーを提示する方法を用いた。質問項目への回答は「あてはまらない」から「あてはまる」の4段階評定で回答を求めた。質問紙の作成について、教育心理学の専門家1名と社会心理学の専門家1名、教育心理学大学院生2名により作成された。

#### ①いじめ場面の種類

A 個人場面对集団場面

B 被害者の特徴がよい場合对特徴がよくない場合（成績・性格・人間関係）

#### ②いじめ場面の提示:ストーリー法

ある登場人物がいじめられる状況の説明とセリフによって、簡単なシナリオを作り、そのいじめ場面に関する質問項目を作成した。その中で、シナリオは個人場面・集団場面(2)×身体的いじめ・言語的いじめ(2)という4つの場面に分かれている。例示した場面のいじめの種類を区分するために、アンダーラインで強調した。なお、以下の文章はいずれも中国語を母語とする者が翻訳し、調査に用いた

場面例：

#### 場面Ⅰ（個人場面・身体的いじめ）

あなたは太郎くん、たけしくんと同じクラスで勉強しています。たけしくんは成績がわるく、わがままで、人とうまくコミュニケーションをとれません。

ある日、たけしくんは太郎くんが、ある子がいじめるところを見て、太郎くんにいじめはわるいことだと言いました。その後、太郎くんはたけしくんの注意に腹をたて、たけしくんをいじめるようになりました。太郎くんはたけしくんを時々なぐったり、無視したり、嫌がらせをしたりします。

太郎くんの「たけしくんいじめ」を見ていて、あなたはどうしますか。

#### 場面Ⅱ（個人場面・言語的いじめ）

あなたは太郎くん、たけしくんと同じクラスで勉強しています。たけしくんは成績がわるく、わがままで、人とうまくコミュニケーションをとれません。

ある日、たけしくんは太郎くんが、ある子をいじめるところを見て、太郎くんにいじめはわるいことだと言いました。その後、太郎くんはたけしくんの注意に腹をたて、たけしくんをいじめようになりました。太郎くんはたけしくんに時々悪口を言ったり、からかったり、わるいうそをいいふらしたりします。

太郎くんの「たけしくんいじめ」を見ていて、あなたはどうしますか。

#### 場面Ⅲ (集団場面・言語的いじめ)

あなたは太郎くん、つよしくんと同じクラスで勉強しています。つよしくんは成績がよく、明るく、人とうまくコミュニケーションをとっています。

ある日、つよしくんは太郎くんたち(いずみくんとあきらくん)がある子をいじめるところを見て、太郎くんたちにいじめはわるいことだと言いました。太郎くんたちは、つよしくんの注意に腹をたてて、つよしくんをいじめようになりました。太郎くんたちはつよしくんに時々悪口を言ったり、からかったり、わるいうそをいいふらしたりします。

太郎くんたちの「つよしくんいじめ」を見ていて、あなたはどうしますか。

#### 場面Ⅳ (集団場面・身体的いじめ)

あなたは太郎くん、つよしくんと同じクラスで勉強しています。つよしくんは成績がよく、明るく、人とうまくコミュニケーションをとっています。

ある日、つよしくんは太郎くんたち(いずみくんとあきらくん)がある子をいじめるところを見て、太郎くんたちにいじめはわるいことだと言いました。太郎くんたちは、つよしくんの注意に腹をたてて、つよしくんをいじめようになりました。太郎くんたちはつよしくんに時々なぐったり、無視したり、嫌がらせをしたりします。

太郎くんたちの「つよしくんいじめ」を見ていて、あなたはどうしますか。

#### ③質問項目の作成

このような4つの場面によって、質問項目は「いじめを止める」、「先生などの大人を呼びに行く」、「見て見ぬふりをして、どこかに行ってしまう」など3項目で、4段階評定で回答を求めた。

## 6. 結果

男女別に、身体的いじめと言語的いじめを分けて分析した。いじめ場面の違い(個人対集団)と被害者の特徴の違い(よい・よくない)を独立変数にし、いじめを見た時の対応の仕方(いじめを止める・大人などを呼びに行く・見てみぬふりする)を従属変数にした

2 要因の分散分析を行った。主な結果を、以下にまとめる。今回では有意のみの結果を記載し、有意ではない結果については紙幅の制限から記載を省略した。

(1) 男子

①身体的いじめ

分散分析の結果、いじめへの対処行動の主効果が有意であった ( $F(2, 210)=3.34, p<.05$ )。この結果より、身体的いじめが発生した時に、傍観者は「いじめを止める」、「大人など呼びに行く」、「見てみぬふりをしない」傾向が強く示された。

②言語的いじめ

分散分析の結果、いじめへの対処行動の主効果が有意であった ( $F(2, 210)=11.36, p<.01$ )。この結果より、言語的いじめが発生した時に、傍観者は「いじめを止める」、「大人など呼びに行く」、「見てみぬふりをしない」傾向が強く示された。

(2) 女子

①身体的いじめ

男子と同様の分散分析を行った結果、いじめへの対処行動の主効果が有意であった ( $F(2, 212) =11.69, p<.01$ )。この結果より、身体的いじめが発生した時に、傍観者は「いじめを止める」、「大人など呼びに行く」、「見てみぬふりをしない」傾向が強く示された。

②言語的いじめ

分散分析の結果、いじめへの対処行動の主効果が有意であり ( $F(2, 212)=10.59, p<.01$ )、特徴と対処行動の交互作用も有意であった ( $F(2, 212) =4.01, p<.05$ )。各条件の評定値の平均と標準偏差を算出したものが表1である。

表1 女子高校生における言語的いじめ場面と被害者の特徴別にみた平均と標準偏差

		止める	呼びに行く	見て見ぬふり	N
被害者の特徴がよくない	平均	2.0	2.4	2.3	26
	(標準偏差)	(0.9)	(0.8)	(0.9)	26
被害者の特徴が良い	平均	2.4	2.2	1.5	30
	(標準偏差)	(1.2)	(1.2)	(0.8)	30
全体	平均	2.4	2.3	1.9	110
	(標準偏差)	(1.1)	(1.0)	(1.0)	110

まず、言語的いじめが発生した時に、傍観者は「いじめを止める」、「大人など呼びに行く」、「見てみぬふりをしない」傾向が強く示された。さらに、交互作用について、各条件の評定値を図に表したものが図1である。LSD法を用いた下位検定(多重比較)を行った。その結果「特徴のよい」子に対する評定値は「特徴がよくない」子より有意に大きかった



( $p < .05$ )。したがって、特徴のよい子にとって、特徴の良くない子より「いじめを止める」、「見てみぬふりをしない」可能性が高かった。この結果は仮説を支持するものではなかった。

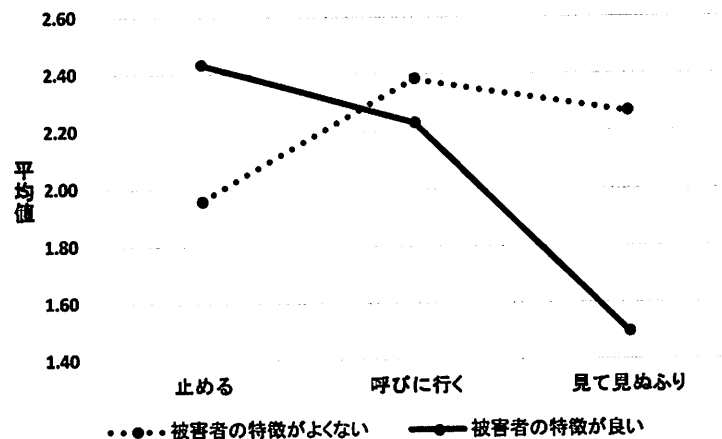


図1 言語的ないじめ場面と被害者の特徴における対処行動の交互作用

## 2. 大学生

高校生と同様に、男女別に、場面（集団場面・個人場面）、児童・生徒の特徴（積極的・否定的）を独立変数とし、いじめへの対処行動（止める、呼びに行く、見てみぬふりをする）を従属変数とした2要因の繰り返しのある分散分析を「身体的ないじめ」と「言語的ないじめ」に分けて行った。

### (1) 男子

#### ①身体的いじめ

分散分析の結果、加害者集団性の主効果が有意であり ( $F(1, 100) = 4.40, p < .05$ )、いじめへの対処行動（「いじめを止める」、「大人などを呼びに行く」、「見てみぬふりする」）の主効果も有意であった ( $F(2, 200) = 73.44, p < .01$ )。

まず、身体的いじめが発生した時に、個人場面は集団場面より有意であった。次に、傍観者は「いじめを止める」、「大人など呼びに行く」、「見てみぬふりしない」傾向が強く示された。

#### ②言語的いじめ

分散分析を行った結果、加害者集団性の主効果が有意であり ( $F(1, 100) = 83.15, p < .01$ )、特徴の主効果も有意であり ( $F(1, 100) = 69.31, p < .01$ )、いじめへの対処行動の主効果も有意であった ( $F(2, 200) = 19.03, p < .01$ )。各条件の評定値の平均と標準偏差を算出したものが表2である。

さらに、加害者の集団性と被害者の特徴の交互作用も有意であり ( $F(1, 100) = 165.91, p < .01$ )、加害者の集団性といじめ対処行動の交互作用も有意であり ( $F(2, 200) = 3.08, p < .05$ )、被害者の特徴といじめ対処行動の交互作用も有意であった ( $F(2, 200) = 5.30, p < .01$ )。

表2 男子大学生における言語的いじめ場面と被害者の特徴別にみた平均と標準偏差

		止める	呼びに行く	見てみぬふり	N
被害者の特徴がよくない	平均	3.0	2.2	2.1	21
	(標準偏差)	(1.2)	(1.6)	(1.3)	21
被害者の特徴が良い	平均	2.9	2.6	1.6	29
	(標準偏差)	(1.3)	(1.1)	(0.9)	29
全体	平均	2.1	1.6	1.2	104
	(標準偏差)	(1.7)	(1.5)	(1.1)	104

まず、言語的いじめが発生した時に、個人場面は集団場面より有意に大きい。次に、「特徴のよくない子」より「特徴のよい子」は有意に大きい。また、傍観者は「いじめを止める」、「大人など呼びに行く」、「見てみぬふりしない」傾向が強く示された。さらに、交互作用について、各条件の評定値を図に表したものが図2である。LSD法を用いた下位検定（多重比較）を行った。その結果、「特徴のよい」子に対する評定値は「特徴がよい」子より有意に大きかった ( $p < .05$ )。したがって、集団場面より個人場面は特徴の良くない子に有意な差が見られた。また、個人場面より集団場面の方はいじめを止める、大人など呼びに行く可能性が高く、見てみぬふりしない可能性が高かった。さらに、特徴のよい子にとって、特徴のよくない子より大人など呼びに行く可能性が高く、見てみぬふりする可能性が高かった。

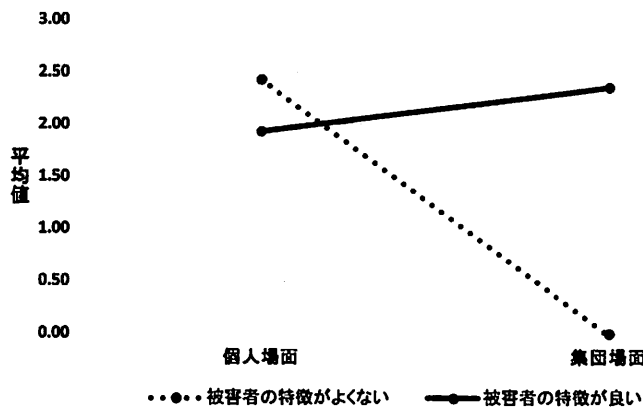


図2 加害者の集団性と言語的いじめ場面における被害者の特徴の交互作用

(2) 女子

①身体的いじめ

分散分析を行った結果、いじめへの対処行動の主効果が有意であった ( $F(2, 130) = 15.17, p < .01$ )。その結果から見ると、身体的いじめが発生した時、傍観者は「大人など呼びに行く」、「いじめを止める」傾向が強く示された。

②言語的いじめ

分散分析を行った結果、加害者集団性の主効果が有意であり ( $F(1, 65) = 29.20, p < .01$ )、被害者特徴の主効果も有意であり ( $F(1, 65) = 27.75, p < .01$ )、いじめへの対処行動の主効果も有意であった ( $F(2, 130) = 3.48, p < .05$ )。さらに、集団性と被害者特徴の交互作用も有意であった ( $F(1, 65) = 116.24, p < .01$ )。

各条件の評定値の平均と標準偏差を算出したものが表3である。

表3 女子大学生における言語的いじめ場面と被害者の特徴別にみた平均と標準偏差

		止める	呼びに行く	見て見ぬふり	N
被害者の特徴がよくない	平均	2.7	2.0	2.3	20
	(標準偏差)	(1.1)	(1.3)	(1.0)	20
被害者の特徴が良い	平均	2.4	2.4	2.2	17
	(標準偏差)	(1.1)	(0.9)	(1.2)	17
全体	平均	1.8	1.4	1.4	69
	(標準偏差)	(1.5)	(1.4)	(1.3)	69

まず、言語的いじめが発生した時に、個人場面は集団場面より有意に大きかった。次に、「特徴のよい子」より「特徴のよくない子」は有意に大きかった。また、傍観者は「いじめを止める」、「大人など呼びに行く」、「見てみぬふりしない」傾向が強く示された。さらに、交互作用について、各条件の評定値を図にしたものが図3である。LSD法を用いた下位検定(多重比較)を行った。その結果、「特徴がよくない」子に対する評定値は「特徴がよい」子より有意に大きかった ( $p < .05$ )。したがって、個人場面は集団場面より「特徴のよくない子」にとって、有意に大きかった。

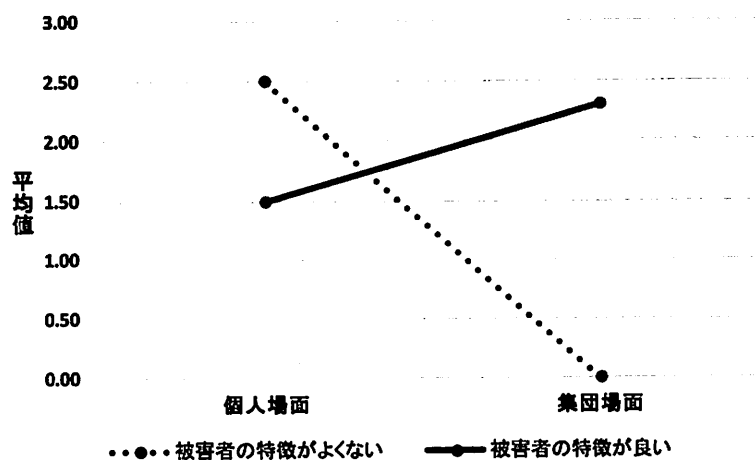


図3 加害者の集団性と言語的ないじめにおける被害者の特徴の交互作用

## 7. 考察

いじめ問題はいじめる子といじめられる子だけの問題ではなく、いじめの傍観者はこの問題を語る際に不可欠な存在になっている。傍観者は直接いじめをしないが、いじめの発生又は減少には重要な要因であると考えられる。

### (1) 仮説について

まず結果をまとめると、中国の男子高校生については、身体的いじめでも言語的いじめでも発生した時に、いじめを直接止めに入って、大人を呼びに行き、見てみぬふりをしないことが示された。女子高校生については、身体的いじめも言語的いじめも、発生した時に、いじめを直接止めに入って、大人等を呼びに行き、見てみぬふりをしないことが示されたが、言語的いじめが発生した時に、特徴のよい子に対して、いじめを止めに入りやすく、見てみぬふりをしにくい傾向が見られた。

男子大学生については、身体的いじめが発生した時に、集団性が強いことが示された。したがって、集団グループより個人の場合の方が援助しやすくなっていた。また、いじめを直接止めに入って、大人等を呼びに行き、見てみぬふりをしないことが示された。それに対して、言語的いじめが発生した時に、集団性が強いことも示された。つまり、個人の場合の方が集団グループより援助しやすくなる。また、児童・生徒の特徴も大きな要因だと考えられる。特徴のよくない子より特徴のよい子に対して援助しやすくなる。また、いじめを直接に止めに入って、大人等を呼びに行き、見てみぬふりをしないことが示された。さらに、特徴のよくない子に対して、個人の場合の方が集団グループより援助しやすくなる。個人の場合には、いじめを止めに入りやすくなるが、集団の場合には、見てみぬふりをしにくくなる。

女子大学生については、身体的いじめが発生した時に、いじめを止めに入らず、大人等を呼びに行かず、見てみぬふりもしないことが示された。それに対して、言語的いじめが発生した時に、集団性が強いことも示された。個人の場合の方が集団グループより援助しやすくなる。また、児童・生徒の特徴も大きな要因であると考えられる。特徴のよくない子より特徴のよい子に対して援助しやすくなる。また、いじめを直接止めに入って、大人等を呼びに行き、見てみぬふりをしないことが示された。さらに、特徴のよくない子に対して、個人の場合の方は集団グループより援助しやすくなる。

一方、女子高校生については本研究の仮説は支持されなかった。具体的には、言語的いじめが発生した時に、特徴のよい子に対して、いじめを止めに入りやすく、見てみぬふりをしにくい傾向が見られた。傍観者は、特徴のよくない子より、積極的で特徴のよい子がいじめに遭っている事態で、傍観者は介入、制止する行動をとることが多かった。この点については、本研究で調査を実施した地域が天津市であったことが影響している可能性がある。天津市は、北京市や上海市と並ぶ中央政府の直轄市であり、大都市と呼ばれる。進

学率が高く、他地域より教育水準が高い。ただ、都市化の影響により、マンションに住むことが多く、市外から転入してきた人々の人口が増える反面で、地域コミュニティの希薄化が顕著になってきている。天津の人々は教養があり、礼をわきまえるが白黒をはっきりさせる傾向があると言われる。そのため、人づきあいがよいが率直で真つすぐであり、強い社会意識が日々の生活の中に根付いている。こうした風潮から、いじめられた時に、特徴がよい子を援助しないと、いじめに介入・制止しないと事態は悪化する可能性があるかと推測したかもしれない。現在の中国では、一人っ子が大多数であるが、受験戦争における成績至上主義の影響から成績ばかりが重視されている。一方、被害者の特徴が良くない子について、彼らの社会的立場は弱いと認識されない、いわゆる思いやりまで考えていない可能性が高いと考えられる。これは今後の大きな課題としてさらに研究を深める必要がある。

## (2) いじめへの援助行動を援助促進する状況要因

### ①被害者の特徴

いじめられる理由はいくつかあり、「太っている」、「小さい」、「力が弱い」といった身体的な特徴、障害や国籍、きょうだいのことなど、本人の努力では解決できないこと、「生意気」、「おとなしい」、「暗い」、「目立ちすぎ」、「わがまま」など性格的なことなど、あらゆることがいじめの理由になりうる。本研究では、被害者の特徴は成績、性格、人間関係という3つの側面から想定した。

中国では、いじめられっ子の特徴（成績、性格、人間関係）がよい時に、傍観者はいじめ阻止行動に入りやすくなる。王（2003）によると、中国人は、自然という客観的要素の力を認め、物事を客観的に評価する。中国人はこの思考様式のもとで、主観性の強い言葉表現を使い、積極性を出そうとしているのである。中国人が持つ価値観として、物事の善悪をはっきりさせる傾向があるため、善良な児童・生徒であれば援助することが当然だと思われていると推察される。

### ②加害者の集団性

最初は仲もよく、対等な関係だったのに、次第に片方がもう一方を支配し始めることがある。同じグループ内で、力関係に差が生じ、いじめの対象になることもある。

中国では、特に大学生の場合には、集団性が強く、集団グループより一人の方に援助行動をとりやすくなる。中国の大学生は全員が大学寮に入る必要があるため、同室の友達との連携が強くなる。そうした凝集性の高さが大学でのいじめに集団性がかかわる理由であろう。

### ③言語的いじめ

大勢で一人の人を無視することは、心に対する集団リンチである。いじめられた経験を持つ多くの人が、言語的いじめ（悪口や無視など）がいじめの中で最も傷つく行為だと答えた。言語的いじめは、いじている方はたいしたことではないと思っても、いじめられた方は深く心が傷つくことがある。

中国において、いじめ問題に人々の大きな関心が寄せられるようになったのは、ごく最近のことである。長い間、多くの中国人は、児童・生徒の間のいじめ事件は避けられないことであると考えていた。中国における学校規模はかなり大きく、一学年に約250名の児童・生徒がいる（楊，2007）。特に注意を引くのは、いじめに対し何もしなかった傍観者が生徒の間で最も多く占めていることである。彼らの多くは、いじめ加害者はわるいと思ひ、いじめられている被害者はかわいそうな人であると思っているが、どうしたらいいかわからない状態にある（桑，1997）。しかし、もし学校側から彼らが見たいじめ事件について聞かれた場合、傍観者は、真実をすべて伝えるということでは一致している。したがって、彼らは、いじめ事件を解決する上で鍵となる存在である。いじめ現象がまだ日本ほど深刻化していない中国において、多くの傍観者を中心にいじめ制止に積極的にかかわるよう働きかけ、よい雰囲気や学級づくりをすることが極めて大事なことであり、いじめを減らす有効な方法であると考えられる。

### (3) 本研究の限界と今後の課題

今後の課題としては、まず、本研究では高校生と大学生を対象としたが、サンプル数が多いとは言えず、調査地域も限られていた。よって、十分な信頼性がある結果が得られたとは言いがたい。今後は、調査人数を増やすと共に、他の地域でも調査を実施し本研究で得られた結果を再検証する必要がある。さらに、いじめは、いじめる子といじめられる子の単純な人間関係だけで発生するものではない。その背景に多くの社会文化的・経済的要因が絡みあって発生する。性別、家族構成、家庭の経済状況、本人の学業成績などといった要素が、いじめと関連すると考えられる。中国のいじめと日本のいじめを比較することで、両者の違いと共通点を明らかにすることができ、いじめ問題の解決への糸口が見つかる可能性がある。本研究の結果は8年前のものであるが、中国におけるいじめ研究はまだ少なく、本研究は今後の研究を促すという点で価値あるものであるといえる。今後は、傍観者の介入を促進する要因を明らかにすること、及び、傍観者が援助者になるための外的要因について検討し、どのような促進要因が重要であるのかを中心に研究を深めていくことが求められる。

引用文献

- 坂西友秀 (2011)「我が国におけるいじめの諸相」高塚雄介編 現代のエスプリ 525 『いじめの構造—いじめに見る現代社会と心のひずみ』至文堂, 2011, 28-41.
- 陳世平 (2001)「児童人間関係の衝突の解決策といじめ行為との関係」『心理科学』2001年 第2期, 2001.
- 久保田真功 (2012)「国内におけるいじめ研究の動向と課題—いじめに関する3つの問いに着目して—」『子ども社会研究』18, 2012, 53-64.
- 森田洋司・清永賢二 (1994)『新訂版 いじめ 教室の病』金子書房, 1994.
- 大坪治彦 (1998)「いじめ傍観者の援助抑制要因の検討」『鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編(50)』, 1998, 245-256.
- Peter Smith(1991)“*Bullying in UK schools: the DES Sheffield Bullying Project* “. *Early Child Development and Care* 01/1991, pp. 77(1):47-55.
- 桑標 (1997)「中国のいじめ」『世界のいじめ イジメの総合的研究6』清永賢二 信山社, 1997, 168.
- 王輝 (2003)「言語と文化的背景—言葉から見た中, 日文化—」, NUCBJLCC, 5, 2, 2003, 67-79.
- 山崎洋 (1996)「いじめにおける第三者の援助態度を抑制する要因」『日本教育心理学会総会発表論文集』, 38回, 1996, 266.
- 楊希洁 (2007)「小中学校いじめの特徴と介入」『中央教育科学研究所学校教育研究部』北京「中国德育」第2巻第8期, 2007, 26-28.
- 元笑予・坂西友秀 (2016)「いじめにおける傍観者の援助行動を促進する状況要因について: 被害者の「社会的望ましさ」の影響に着目した検討」『埼玉大学教育学部研究紀要』V65(1), 2016, 69-84.
- 張文新 (2006)『中小学生的欺负问题与干预』山東人民出版社, 2006.

（此处为模糊的正文内容，包含多段文字，因图像清晰度不足，无法准确转录。推测为教育实践研究相关的论述。）